

11 節. 「マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると」

「11 節から 18 節まではマリア・マグダラを主人公とする物語である。」(伊吹)
このマグダラのマリアはヨハネ福音書を書いた教会と深い関係にあると考えられる。「彼女がヨハネ教会で重要な役目を果たし、この教会では婦人の活動が重きをなしていたのではないかと考える学者もいる。……。ペトロの信仰について何も述べられていないのに対してここでマリアは主の顕現に出会うのである。彼女もまた十字架の下に立っていた。」(伊吹)

マリアが墓の外に立って泣いていたことは、それほど主イエスを愛していたことを表している。彼女は愛弟子がそうしたように「身をかがめて墓の中を見る」。「身をかがめる」(παράκλιπτω、パラクプトー) ことは、ここと 5 節の「もう一人の弟子」(愛弟子) にしか使われていない。ヨハネ教会とのつながりを伺わせる言葉。

12 節. 「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。」

「遺体」と訳されている言葉はこれまで言及した「ソーマ」(σῶμα)。

主イエスの体が置かれていた場所に、「白い衣を着た二人の天使」がいたことは、マタイ 28:3、マルコ 16:5、ルカ 24:4 にも記されている。但し、「一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた」という部分の含め若干の違いはある。

13 節. 「天使たちが、『婦人よ、なぜ泣いているのか』と言うと、マリアは言った。『わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。』」

「婦人よ、なぜ泣いているのか」という問いは 15 節で主イエスによって繰り返される。マリアの言葉は 2 節と 15 節にも繰り返されている。

14 節. 「こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。」

マリアは身をかがめて墓の中を見ていたところから「後ろを振り向く」。つまり墓とは反対の方向である。そこに復活の主イエスが立っておられるのが見えたが、「それがイエスだとは分からなかった」。「復活したイエスは地上の目ではすぐそれとわからないのである。これは 21:4 にもあり、ルカではエマオに向かう弟子たちについてもそう言われている。……。このことはイエスの復活体が地上の身体と同一性を維持しつつ、全く異なるということである。どのようにかは表現されていない。復活の栄光というより他な

い。……。地上のイエスとは違って見えるということは確かであろう。パウロは『霊のからだ』と矛盾のように言っている(1コリント 15:44)」(伊吹)

15 節. 「イエスは言われた。『婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。』マリアは、園丁だと思って言った。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。』」

主イエスの言葉、「婦人よ、なぜ泣いているのか」という問いには、「既に死は克服されており、泣く理由は、その人の不在に直面しても何も無いということなのである。天使の口からもこの意味のことが言われていたのかもしれない。というのは、この問いは2回もくり返されているからである。そして『主は生きているからである』(14:19、ルカ 24:23 など参照)。これは人類初めての経験なのである。……。マリアの困難は人間一般の困難でもあり、それは復活の神秘の超越性を物語っている。ルカ 24:31 には『彼らの目が開け』とある。」(伊吹)

マリアの「どこに置かれているのか分からない」という言葉は3回目(2、13、15)となる。

16 節. 「イエスが、『マリア』と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、『ラボニ』と言った。『先生』という意味である。」

主イエスは「マリアム、**Μαριάμ**」と呼ぶ。「この呼びかけでマリアはイエスを認める(10:3 参照)。『声はまねができない響きを持つ。信じることが弟子たちにあまりに難しくなるのは目にたよるから』。すなわちケーリュグマ(宣教)によって信じられる(20:29)。この呼びかけはそれが復活者の自分と呼ぶ声であるとしてマリアに的中したのである。それは「わたしはあなたを死っている。どうしてわたしと分からないのか」と言っている。それは我と汝の関係の内でも汝というものに的中する呼びかけである。いや、それが的中するところにすでに新しい信仰するマリアがいるのである。この名の持つ深みは測り難い。こうしてマリアは超越に向けて覚醒する。」(伊吹)

マリアは再び「振り向く」。ここでは物理的に振り向くことではなく、ルカ 24:31 「すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」ということであろう。「この意味は“*She recognized him*”ということなのだろうか。」(伊吹)

「ラボニ、先生」。「ここでマリアは弟子としての呼びかけをしている。すなわちイエスにとっては女も男も区別はない。この名を呼ばれることはわれわれもこうして己が名を呼ばれるのであり、そこに愛と希望に満ちた空間が全く新しく開かれるのである。マリアの感動についてはこの返答の答え以外には何も描かれていない。」(伊吹)

17 節. 「イエスは言われた。『わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。』

「わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る」と。』」

この節は『『解釈者の十字架』として知られている』（伊吹）。それほど難解ということであろう。

「すがりつく」と訳されている言葉（ἄπτω、ハプトー）は、ヨハネではここしか使われていない。「この句は、イエスは父のもとに上るのだから引き止めるな、という意味ではなく、ここではイエスへのアクセスがないことを言っていると解せられる。ふれることができない状態なのである。言い換えれば顕現したにもかかわらずイエスは不在なのである。すなわち 20:27 のトマスへ「指をつけてみよ」というイエスとは全く違う状況である。『わたしはまだ父のもとに上っていない』とイエスは言う。ヨハネにとっては、別れの説話で、イエスの死のことが話されず、その代わりにそれは『父のもとに行く』と言い表されていた。すなわちヨハネによっては、死は父のもとに行くことなのである。従ってそれがまだ起こっていないということは、ヨハネのコンセプトに反する。ここでは明らかに「父のもとに上る」というのは復活の後の昇天というように両者は分かれて述べられている。これはいわばルカの理解による順序で書かれていると考えれば比較的たやすく理解されよう。もちろんルカでは復活者の弟子たちへの権限のあとに昇天が起こっている。しかしここでは使徒言行録 1:3 によれば、復活したイエスはあたかも地上に 40 日止まっているごとくであり、その間度々弟子たちに現れている。復活の後に昇天が来るというコンセプトでヨハネ 20:17 は書かれていると考えられる。そしてこれが以上のようにヨハネのコンセプトには適合しない。したがってヨハネは、彼の伝承をここに受けて、それを自分のコンセプトによって再解釈していると考えより他ないのではなからうか。」（伊吹）

「イエスはこれまで神のことを『わたしの父』と呼んできたが、これがイエスが十字架にかけられ殺されて死ぬ理由になったのである（5:17-18、10:30-33 参照）。父と子との独特な関係、これが実は神と等しい者であるイエスの独自の性格を決めていたものであるが、この復活のイエスは『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である』と神について言う。神とイエスにおける愛の関係と弟子たちと神との愛の関係が今や復活によって実現した。イエスの父が弟子たちの父でもあると宣言しているのである。これは言うまでもなくイエスの十字架と復活によって、その一体性・一致性が実現した結果である。このことのいわば証拠としてイエスは神のもとに上る、という言葉となって語られたと読むべきであろう。その喜びの音信を携えて『マグダラのマリアは弟子たちのところへ行行って、『わたしは主を見ました』と告げ、『また、主から言われたことを伝えた』のである。」（松永）

18 節。「マグダラのマリアは弟子たちのところへ行行って、『わたしは主を見ました』と告げ、また、主から言われたことを伝えた。」

「マリアの名は 1、11、18 節と区切りに表れる。『主』は 20、25、28、21:7、12 節にもそう出て復活した主を意味する。……。このマリアの告知に対する弟子たちの反応は何も伝えられ

ていない。これは他の福音書も同様である。ここでは愛弟子の信仰についての反応も書かれていない。マリアは役目を終えて姿を消す。」（伊吹）